



SERVICE CLUB TO THE YMCA
名古屋 プラザ 〈月報〉
THE Y'S MEN'S CLUB OF NAGOYA PLAZA



西日本区中部ホームページ・<http://www.ys-chubu.jp/>

2012年4月号

「主題」

国際会長 : 「とにかくやろうー成せばなる」

アジア地域会長 : 「とにかくやろうー成せばなる」

西日本区理事 : 「ウィズの原点、愛と奉仕で社会に貢献」

中部部長 : 「まず一歩 楽しもう、学ぼう、働こう、そしてつなげよう」

プラザクラブ会長 : 「ウィズなウィズになろう」

【YMCA サービス (ASF)・YMCA サービスはウィズ活動の根幹です。より一層のサポート体制の向上に努めましょう!】

4月例会および今後の予定案内

【4月第1例会】

日時：4月12日（木）・18：45－

場所：名古屋YMCA会議室

内容：卓話「月報の作り方・文章の書き方」

講師：櫛田 守隆

【4月第2例会】

日時：4月26日（木）・18：45－

場所：名古屋YMCA会議室

内容：次月例会打ち合わせ

出席義務者：役員（大島・櫛田・後藤）

5月担当者（後藤・大島）

6月担当者（大島・高田）

【今後の予定】

1. 根ノ上祭り

日時：4月30日（月・振替休日）・10：30－

場所：根ノ上キャンプ場

2. 5月第1例会

日時：5月10日（木）・18：45－

場所：名古屋YMCA会議室

内容：卓話 講師・想念寺住職 渡辺観永氏

3. 5月第2例会

日時：5月24日（木）・18：45－

場所：名古屋YMCA会議室

4. 6月第1例会（POM）

日時：6月14日（木）・18：30－

場所：ケンボー

5. 老人ホーム音楽慰問

日時：6月17日（日）or 24日（日）

場所：アミーユ星崎

3月例会およびその他活動報告 (敬称略)

役 員	会 員 氏 名	出 席 者				
		1	2	①	②	③
会長	大島 孝三郎	○	○	○	○	○
	小澤 幸男		○			
書記	櫛田 守隆	○	○		○	○
会計	後藤 猛	○	○			
直前会長	島崎 正剛	○				
	鈴木 誉三	○				
副会長	高田 廣	○	○		○	○
	常盤 真理子	○				
連絡主事	万福寺 昭美	○	○			
ゲスト	新 学	○				
	春日井雍一郎	○				
	馬淵 捷吉	○				
	清水 昌一	○				
	榊原 章夫	○				
	森 保彦	○				
	中山 篤史	○				
	山本 茂樹	○				
課外活動	①希望の風 IN 名古屋 (3/11)					
	②中部評議会 (3/20)					
	③YY フォーラム (3/20)					
出席率・%					100.0	
1. ニコボックス						
2. オークション						
当月合計／累計					5500	
5月号ブリテンの寄稿者は常磐さんです。 400字詰原稿用紙4-5枚を目安にお願いします。						

ASF=Alexander Scholarship Fund(アレキサンダー奨学資金)

3月第1例会（3クラブ合同例会）報告

プラザ、南山、グランパスの3クラブ合同で開催する「堀川 1000 人調査隊」の講演会が3月8日、名古屋 YMCA の3階会議室で開かれた。クラブ会員、ゲストら35人が参加、名古屋の都心を流れる堀川の浄化を目的に、学校、企業、一般市民、区役所などが参加する「調査隊」の事務局長を務める堀川ライオンズクラブ服部宏氏を講師にお招きして、「堀川応援隊の活動」と題した講演を行った。

堀川は1610年福島正則が名古屋城築城に際して、資材運搬を目的に水路として掘削し、その後は物資の輸送に使われるようになった。さらに開削、延伸工事で延長16.2キロの一級河川は、昭和初期から汚染が進み、高度成長時代には工場廃水や生活廃水が流れ込み異臭を放つどぶ川と化した。

平成15年「堀川を清流に」をスローガンに名古屋堀川ライオンズクラブなどが中心に「堀川 1000 人調査隊」を立ち上げ、学校、企業、区役所など217隊、2007人が参加。活動は庄内川からの導水増量、名城下水処理場の薬品高度処理の効果などを調査し役所に上げる、「官が実験して、民が検証する」官庁と民間のキャッチボール、いわば、ほどよい官民協働の循環が始まった。現在は2388隊、2万1362人に達している。

平成19年からの第3次調査隊は、木曽川の導水後の水質調査、生き物の生態観察などを行い色々な実態が解明された。その一つに、川底に浮遊する白い塊は、雨の日に合流式の下水管を通じて、家庭排水の中の油が流れ込み固まったものと分かり、「雨の日には家庭から洗剤や油を流さない100万人運動」を展開している。「今後とも堀川の浄化と再生にご協力ください」と結んだ。



(堀川応援隊、隊員募集・費用負担、活動義務などはありません)

3月第2例会報告

日時：3月22日(木)・18:45-20:00

場所：名古屋 YMCA 会議室

1.5月第1例会・小澤

想念寺住職 渡辺観永氏に卓話をお願いする。

2. 老人ホーム音楽慰問・小澤

日時は6月17日(日)か24日(日)のいずれか、場所はアミーユ星崎。

3. POM 開催・櫛田

6月は西日本区大会などで何かと物要が多く、恒例の一泊旅行をケンポーでの飲み会とする。

4. 連絡、報告事項・大島

(1) 新年度ロースター購入冊数

西日本区 6冊 東日本区 1冊

(2) 西日本区大会

出席者6人、参加費・宿泊費合計25000円は、4月第1例会で徴収する。クラブ会費も重なりますので注意のこと。なお、会長は本日の欠席者2人へ宿泊の有無をご確認願ください。

(3) 根ノ上祭り

日時：4月30日(月・振替休日) 10:30-

場所：根ノ上キャンプ場

5. 年賀当選切手・後藤

最終収集枚数18枚 島崎さんに取り寄りを依頼する。

18枚×@130=2340円、ニコボックスへ。

中部評議会報告

中部評議会は3月20日、名古屋 YMCA3階会議室で午後1時半より評議員ら31人が出席して行われた。長谷川部長の挨拶は「この半年で会員が減じたので、次の部長に引き継ぐまで増やす」と力強く宣言、引き続き評議会に入った。第1号議案から5号議案まで定足数に足る評議員の賛成により、原案とおり承認可決された。(部則9条5項) 詳細については後日配布の「第2回中部評議会報告」をご参照ください。



(長谷川部長殿、八面六臂のご活躍ご苦労さまです。)

概要は次のとおり。

第1号議案 今年度前半期中部事業報告 (略)

第2号議案 次期中部部長・次期部会ホストクラブ

荒川 文門 名古屋南山クラブ

部長主題「前へ! 声を掛け合い!」

新たな仲間と声を掛け合い「前へ!」をモットーにワイズの輪をもっと大きく

活動計画・合同例会の推進・広報活動の活発化・YMCA

リーダーの育成・IBC との効果関係構築

第3号議案 次々期中部部長・中部部会ホストクラブ
平口哲夫 金沢犀川クラブ

第4号議案 次期中部役員

部役員 部長 荒川 文門 名古屋南山 (以下略)
事業主査 (略)
クラブ会長 (略)

第5号議案 次期中部部会の日時・会場

2012年8月26日(日) 名鉄ニューグランドホテル

第6号議案 西日本区事業組織の見直し(協議)

理事長提案に賛成する。 以上

「YYフォーラム2012」報告

「ここ」からできるしえん、「きもち」を「カタチ」に
震災から1年 と題して「YYフォーラム2012」(名古屋 YMCA ワイズメンズクラブ国際協会西日本区中部主催)が3月20日、名古屋 YMCA3 階会議室であり、80人が熱心に聞き入った。

冒頭、総合司会の鈴木一弘さんは、参加者に昨年3月11日の地震を強く感じた人から全く感じなかった人まで4段階に分け、扇形に配置された席の前に立たせ、それぞれの人にその時居た場所と感想を尋ねた。強く感じた人に、福島市でカフェギャラリーを両親と営んでいた丹治宏大さんが指名され、震災直後から現在までを語った生の言葉は、後の座談会、質疑応答の発言とをまとめて最後に記した。

第1部「ユースが見た被災地とその支援」は、キーワード「喜怒哀楽」の菅沼あずみさんは、宮城県七ヶ浜に入り「被災者の方に寄り添いながらお話を聞く」。梶野伸、古賀英さんはキーワード「絆」、仙台市宮城野区ボランティアセンターの支援班で配車・資材貸し出しなどをがんばる。しろうま、サザエさんは「おらたちもつとあそびたいっぺ」と苦労した方言をキーワードに、仙台・神戸のユースと一緒に子どもたちとそば打ちやソーセージ作りなど、楽しいキャンプ活動を過ごしました、など3組の報告があり「いま、自分たちができることは何かを自問し行動する」と語った。

第2部はフリージャーナリストの関口威人(たけと)さんの司会で、新林智子さん(臨床心理学士)、竹佐古真希さん(日本基督教団白河オルガニスト)、先ほどの丹治宏大さん(市民放射能測定所)3人の座談会が行われ、「復興とは何だろう、地域によって違う。きめ細かい対策を」など切実な話に終始した。

なお、ある講演者は「チェルノブイリの影響で青森県にはがん患者が多い」と発言されたが、実証されている事実だろうか。

『キーワード「Image(イメージ=心像)」・地震のとき子どもと屋外に飛び出した。前の家が揺れ、瓦がバラバラと落ちるのを見て、恐怖から動けなかった。翌12日1号機の水素爆発をテレビで見て避難を決意、14日

小学校3年と5年の子どもと奥さんの実家愛知県愛西市に向け車で出発したが、白河でガソリンが尽きるもスタンドはどこも閉鎖中、福島からタクシーで東京に、東京からは新幹線で無事愛西市にたどり着いた。ご当地愛知に来て、われわれ被災者を励ますいろいろな行事にお招きいただくのはありがたいが、われわれには時に押し付けがましく、上から見られているような、なんとなく被害者意識がある。たとえば「美味しいですか?」ではなく、一緒に食べて「美味しいね!」と共感する、ちょっとした心遣いが嬉しくなる。福島ではいま、観光に来てください、福島産の野菜や魚を買ってください、とは言えない。ましてボランティアの方々に、福島に来て支援してください、とお願いできない状況です。まず来て見てほしい、感じてほしいのですが。いまの福島は、「福島で頑張ろう」の掛け声とともに「避難」から「雇用」にと、早くも地元回帰のスローガンに置き換えられつつあり、子どもを外に出しづらい雰囲気があります。将来の子どもたちの健康が心配です』



(丹治さん、テレビカメラを横に被災者の苦悩を淡々と語る)

透析患者の不安

遥かなる山河へ、夜討ち朝駆けで溪流釣りを始め、彼これ40~50年になろうとしています。

夜は11時頃に2,3人で集合し、朝であれば3時頃に集まり、片道2,3時間はかかるころまで車で釣行している。そのようなことで、夜の運転は慣れていると思っています。

今から5年ほど前に、ある透析病院の患者さんの夜の送迎をしてみてくれないか、とのシルバー人材センターからの要請で、まあ良いかなと思いお受けしたのが今の仕事です。5人乗りの普通車に2,3人をお乗せし、1人ひとりのご自宅へドアツードアでお送りするのが私の仕事です。中には、車椅子でしか移動出来ない患者さんの乗降へのお手伝いは、当然私たちが行います。

この病院の特徴は、患者さんから送迎費用は一切いただいていません。当初、同乗された患者さんたちのお話の中で今日は2000引いたとか3000引いた、などのお話を聞き、どういう数字のことか解らなかったの

で尋ねたところ、それは患者さんの体重から 2kg、3kg の水を引くとの話です。

透析患者は腎臓機能不全により老廃物の対外破棄が出来ないため、腎臓の機能を人工的に代替するというのが人工透析で、4時間ほどかかります。この人工透析では「老廃物除去」「電解質維持」「水分量維持」を処理してくれます。そのために、体重が増えればその分の水を引くことが必要になってくるということです。

2kg～3kg 引くということは自身の体重がその分軽くなるということで、わずか4時間の透析で体重がこれだけ下がる。当然血圧も下がり、ひどい方では上が80下が50、それこそ患者さんはふらふらで、透析後はしばらく休んでいなければ血圧が上がって来ません。したがって、患者さんの日常生活では、水分の摂取は非常に大事なことで、多く飲用したらそのまま自身の体重が増えてしまい、また人工透析の時その分引かなければならないので、患者さんの自己管理が非常に大事ことになってきます。

昨年、3月11日の東日本大震災の時、透析患者の受け入れで大変難しい問題がおきていたようだ。透析処理には大量の水が必要で、透析病院の多くは被災地の市町村水道課に水の供給を要請したが、ままたず大変苦勞をしたようです。そうした中、現地の透析病院では患者の受け入れ態勢がとどこうり、透析患者の他府県への移送を打診し、例えば、受け入れ先が新潟県、山形県へと広がったようです。

このようなニュースを患者さんたちが受け止められ、東海、東南海、南海地震の3連動巨大地震が発生したら自身の透析病院はどうなるか？透析患者さんたちは今から心配をしているのが現状です。

追伸：中日新聞 2012年3月11日 「ニュースを問う 震災で透析患者置き去りをごらん下さい」
(後藤 猛)

聖書の言葉

【「なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負い切れなかった軛(くびき)を、あの弟子たちの首にかけて、神を試みようとするのです」(使徒の働き 5:10)】

【エルサレムで使徒や長老たちの会議の中で使徒ペトロが話した言葉である。「軛」という言葉はモーセの律法を指しており、「あの弟子たち」は、キリストを信じて受洗した異邦人を指している。ファリサイ派から入信した人たちは、その異邦人たちにも割礼を受けさせ、律法を守らせるようにと主張してやまないの、ローマ軍の百人隊長らに洗礼を受けた時の神の働きを体験したペトロは、入信した異邦人たちを、ユダヤ教の律法で束縛する試みに強く反対したのである。使徒パウロは、ガラテヤ書5章の中で、「キリストは私たちを自由にしてくださったのです」と強調して、自由な愛によって働く信仰を説いているが、この精神は現代にお

いても大切で、人間的組織の法を守るだけでの生き方であってはならない。(中日新聞3月3日「今週の言葉」青山玄著より)】

この文章の「どこ」を「どう」直しますか

次の文章は、ある広報紙に掲載された一般読者のエッセイ(左横書き)を一部修正したものです。

『およそ十年ほど前から、我が家の周辺の景色が変り始めました。雑木林と畑が点在する丘陵地帯だったこの地に、震災により家屋消失や戦地からの引揚者などにより、深刻な住宅難を解消するため、市は昭和二三年(一九四八年)から木造1戸建ての分譲住宅を造り始めた。

そしてわが家が越してきた昭和三四年['59 年]には、主要道路の拡幅は終えていた。然し生活道路は未舗装でシトシト雨はともかく、ザーザーと大雨が降ると急な坂道を一気に流れ、下で交差する大通りはグチャグチャだった。だからこの辺りの土は粘土質で水捌けが悪く、畑は所々にあるが収穫はあまり芳しくないようである。

この頃に居を構えた親は、戦中・戦後に生まれた子どもと住み、その子の子いわゆる団塊ジュニアの3代目は、ここを離れて帰ってこない。家を造った初代の親はとっくに死亡。家を建て替えた戦中・戦後派の2代目は、七十歳前後の老夫婦二人かその片割れを亡くした独居老人。いつしか、わが家の脇の道路の2,300mほどの両側は、一人か二人の高齢者が住む町並み。付近では「じじばば通り」との噂。

こうなると2代目が打つ手は三つ、息子が娘家族を呼び戻して一緒に住むか、息子が娘家族のところに行ってお世話になるか、お屋敷を売り払ってどこかに移り住むか、である。子どもが帰れば、2世帯住宅にリフォームするか建て替える、売ればそこに新しい家が建つ、いずれにしても洋風の洒落た家が並んで、景色が徐々に変わってきた。

五年前、向かいの山手さんが近くのマンションに引っ越します、と挨拶に来られた。半年前にガンでご主人を亡くされた奥さんは「最初は精神から来る食欲不振と診断されましたがなかなか直らず、一年後別の病院で「喉頭ガン」と言われ、すぐ手術しましたが手遅れで1ヶ月後に亡くなりました。」と問わず語りに話された。セカンド・オピニオンにICの言葉が頭をよぎる。嫁いだ1人娘も戻らない、二〇〇坪のお屋敷に一人住まいは寂しい、と笑いながら帰られた。その三ヶ月後、二百坪の屋敷と庭は更地にされ、三軒の分譲住宅が建ち、早々に埋まった。入居した秋葉、池袋、上野さん宅は、奇しくも三十代後半から四十代前半のご夫婦と、幼稚園から小学生までの子ども2人連れは、三家族とも一緒である。久しぶりに、朝の登校時、前の集合場所から、はしゃぐ子供の声が聞こえるようになった。』